了光句碑

（名古屋市中村区道下町 1-23 終南山光明寺に現存）

佐くら咲山や志多行鐘の声　　茶丁
（桜咲く山や下行く鐘の声）

翁、姓柴田、別称了光、又号喝々齋。受俳諧于五竹房、以倡於是郷、一時同志彬々。嗣響至今不絶、翁之力也。翁没十七年矣、本月廿四、為其双忌。故従遊数子感時節而興懐、纉旧志以莫忘。乃勒其生平一作表此間、属予記之。翁行事詳存他碣、茲不贅。寛政紀元五月朔、婚族姪、鈴木朗識。

翁、姓は柴田、別称は了光、また喝々齋と号す。俳諧を五竹房に受け、以ってこの郷に倡（となな）え、一時は同志彬々たり。嗣響の今に至るも絶えざるは翁の力なり。翁没して十七年、本月二十四日その双忌をなす。もと従遊の数子、時節に感じて興懐し、旧志を纉（つづ）ぎ以って忘るることなし。すなわちその生平の一作を勒してこの間に表し、予に属してこれを記せしむ。翁の行事は他碣に詳らかなればここに贅せず。寛政紀元五月一日、婚族姪、鈴木朗しるす。

翁の姓は柴田、別称は了光であり、喝々齋とも号した。俳諧を五竹房〔田中五竹坊、1700～1780〕に学んでこの地方に活躍し、一時は俳句仲間がたくさんいた。その遺風が今も残っているのは翁の力である。翁が亡くなって 17 年、今月 24 日にはその法事がある。門下生数人は当時を懐かしみ、翁の志を継いで忘れていない。そこで翁の代表作を句碑に刻み、私に頼んでこの碑文を書かせた。翁の事績についてはすでに詳しい墓碑銘があるのでここには記さない。1789 年 5 月 1 日、翁の次男の妻の弟、鈴木朗（あきら）〔1764～1837、国語学者〕が記した。

柴田了光之墓

（名古屋市平和公園・大法寺墓地に現存）

府城西琵琶洲之農柴田氏、諱良無、字久作、法名了光、其居称喝々齋。考諱如説、妣山内氏。久作氏、本姓寺澤、贅壻于柴田氏、後冒婦家之姓云。生四男二女。男、長惟親為其伯父惟長義子、次名景浩字玄龍業医、次利兵衛九吉二人先没。女、一適竹内氏、一贅壻佐藤氏而有其家。久作氏、天性寡欲而喜仏教、夙悟出世解脱之旨、不以名利攖其心。又喜為俳諧歌者、嘯傲風雲月露。世目以風流清逸之士。以享保戊戌十二月二十四日生、安永癸巳五月二十四日病終于家。葬城南永陽山大法寺中。家父在時与久作氏相親善、予亦与玄龍氏善。玄龍氏請予銘其碑。義有所不可辞焉因作。銘曰、視死猶生、視生猶死、生則楽仏教、死則安于此。旧蜚畎畝之中奇哉柴田氏。千村諸成識。男景浩建。

府城の西、琵琶島の農、柴田氏、諱は良無、字は久作、法名は了光、その居は喝々齋と称す。考(ちち)の諱は如説、妣(はは)は山内氏なり。久作氏、本姓は寺澤、柴田氏に贅壻し、後に婦家の姓を冒すと云う。四男二女を生む。男、長は惟親、その伯父惟長の義子となる。次、名は景浩、字は玄龍、医を業とす。次、利兵衛と九吉とは先に没す。女、一は竹内氏に適し、一は佐藤氏を贅壻してその家あり。久作氏は天性寡欲にして仏教を喜び、夙に出世解脱の旨を悟り、名利を以ってその心を攖せず。また俳諧歌をつくることを喜び、風雲月露に嘯傲す。世、目するに風流清逸の士を以ってす。享保戊戌十二月二十四日を以って生まれ、安永癸巳五月二十四日、家に病終す。城南永陽山大法寺中に葬る。家父在りし時久作氏と相親善し、予また玄龍氏と善し。玄龍氏、予に請いてその碑に銘せしめんとし、義のあるところ辞するべからざるによって作る。銘に曰く、「死を視ることなお生のごとくし、生を視ることなお死のごとくす。生くればすなわち仏教を楽しみ、死すればすなわちこれに安んず」。旧蜚畎畝の中、奇しきかな柴田氏。千村諸成しるす。男景浩建つ。

名古屋城の西、枇杷島の農民・柴田氏、諱は良無、字は久作、法名は了光、その住居は喝々齋と称する。父は寺澤如説と言い、母は山内氏であった。久作氏の本姓は寺澤であったが、柴田氏と結婚し、のちに妻の実家の姓を継いだ。四男二女があり、長男・惟親はその伯父・寺澤惟長の養子となった。次男は、名は景浩、字は玄龍〔のち龍溪、1745～1812〕、医師である。三男は利兵衛、四男は九吉であるが、この二人はすでに亡くなった。長女は竹内氏に嫁ぎ、次女は佐藤氏を婿に迎えた。久作氏は生まれつき欲が少なくて仏教を好み、早くから出世解脱の意味を悟って名利にとらわれなかった。また、俳句を作ることを好み、風雲月露を歌った。世の人は柴田氏を風流清逸の士と見ていた。1718 年 12 月 24 日に生まれ、1773 年 5 月 24 日に病気のため自宅で亡くなった。名古屋城南の永陽山大法寺に葬られた。私〔千村諸成。1727～1790。尾張藩士、藩主宗勝の小姓。漢詩人、画家、陶芸家〕の亡父・千村夢澤〔1694～1773。尾張藩士、京都買物奉行。漢詩人〕は久作氏と親しかったが、私もまた玄龍氏と親しい。玄龍氏に碑文を頼まれたのだが、そのような義理があるので断わるわけにはいかない。久作氏の銘にいわく、「死をあたかも生のように見、生をあたかも死のように見る。生きているうちは仏教を楽しみ、死んだら仏様に身を委ねる」。柴田氏みたいな人は農村には珍しいなあ。千村諸成が記し、息子・景浩が建てた。

（2011 年 12 月 11 日　上村泰裕）

千村諸成「綴雲硯の銘ならびに序」

『自適園集』二編巻之四（1785 年）

城西琵琶邑の商・左丁なる者、家に一石硯を蔵(おさ)む。予をしてこれを名づけしむ。かつ銘をなさんことを請う。その硯、石理貞潤、堅緻而磬、円池あり、雲形を鐫(ほ)り以ってこれを繞(めぐ)らす。予、もとより賞鑑に乏しきときは、則ちいずれの地か出だす所を知らず。しかもその制造の巧、至れりと謂うべし。予、すなわちこれに名づくるに綴雲を以ってす。在昔、馬太傅〔司馬道子、364～403〕、天月明浄に会うて、すべて繊翳なきに嘆じ以って佳となせり。謝景重、坐にありていわく、「意(こころ)に謂えらく、すなわち微雲點綴せんには如(し)かず」と〔『世説新語』からの引用〕。予、円池を以って月となし、ゆえにこれを名づく。けだし太傅、「卿、心を居(お)くこと浄からず。すなわちまた強いて大清を滓穢せんと欲するや」というごときに至りては、則ち謝氏、小さく屈する者に似たり。予、おもえらく、謝が言は甚だ佳なり。もしそれ一夕繊翳なくば、月を賞(たた)うる者の願うところに足らん。これを人の一世に在るに譬(たと)うるに、富貴を求めてこれを得、子孫繁敷、躬(みずか)らかつ疾病なく、なお一も不諧あらざるなり。これその福の盈満して全く天幸を得る者なり。膏壌沃野を行く者の平平易易として労するところなきがごとし。もし雅趣を問わば、いずくんぞこれあらん。奇屈絶境を渉る者のごときは、盤跚勃窣、艱苦労憊、而して後に雅趣ありと謂うべし。然りといえども、予、もとより福を得るを悪む者にはあらず。盈の久しうすべからざるの道を知りて自ら抑え自ら損せば、則ち天を知るに庶幾(ちか)からんか。然るときは則ち、雲あり円月に點する者の以って大佳なりとなさんも、豈に可ならざらんや。左丁、商賈と伍をなすといえども、その間に奮蜚し、禅に参じ道を問う。いわゆる信男なる者なり。あるいは世俗のなせる諧歌なるものを好み、自ら十七言の什を咏じて以って風雲月露をその中に斡旋す。楽以って歳を終う。また清逸の士なり。時時この硯を観、その好むところ二の者に稽(くらぶ)ることあり。則ち雅趣を得るにおいてそれ倍蓰せん。すなわち銘を作りていわく、左丁が硯、池あり月の円なるごとし。雲の點綴する、その円を虧(か)くに似たり。これを以って盈の久しうすべからざるを悟らば、天を知ると謂うべし。天を知る者の誰ぞ、左丁あり。

名古屋城西、琵琶島村の左丁〔柴田了光（1718～1773）と思われる〕という商人〔墓誌では「農」とされている。枇杷島市場の青物問屋だったと思われる〕は、家に硯を一つ持っており、私にその命名を頼んできた。しかも銘もつけてくれと言う。その硯はきめがなめらかで、堅く美しい。まるい池のまわりを雲形に彫ってある。私は鑑定に詳しくないので、どこの石かはわからない。しかし、この硯が巧く作られていることは申し分ない。そこで私は、この硯を「綴雲」と名づけた。むかし東晋の司馬道子〔364～403〕が美しい月を見て、少しも曇りがないのを褒めた。傍らにいた謝景重は、「少し雲がかっていたほうがよさそうに思いますがね」と言った〔『世説新語』からの引用〕。私は硯のまるい池を月にたとえ、雲形

があるので綴雲硯と名づけたのだ。想像するに、司馬道子に「お前は心がきれいではないから、きれいな月を汚そうとするのではないか」とからかわれて、謝景重は身の置きどころがなかったろう。私は謝景重の意見が非常によいと思う。もしある晩少しも曇りがなければ、月を愛でる人の願い通りではあるだろう。これを人の一生にたとえれば、富貴を願ってこれを得、子孫繁栄、自分も健康で、不愉快なことは何ひとつないといった具合である。幸福が満ち足りて、全く天の恵みを得た人である。肥沃な土地を旅して楽々と何の苦労もないようなものである。雅趣の点から言えば、あまり面白いとは言えない。険しい大自然のなかを旅する人は、よろめき腹ばい、くたびれ果てたその後に雅趣を味わうのである。とはいえ、私は幸福を得た人を憎むわけではない。栄華は永遠ではないという道理を知って自重するのは、天命を知ることに近いかもしれない。そうだとすれば、満月に雲がかった人こそ最も美しいと言ってもよいのではないか。左丁は商人の仲間ではあるが、発奮して参禅し道理を問う信心深い人である。その一方で俳諧を好み、十七文字のなかに風雲月露を詠み込んでいる。いつも楽しんでいる清逸の人である。時々この硯を見て、雲と月を座禅と俳諧に比べている。つまり、何倍にも雅趣を得ているのである。そこで以下の銘を作った。左丁の硯は池あり満月のごとし。雲は満月にかかっているようだ。これによって栄華は永遠でないことを悟るならば、天命を知ったと言える。天命を知る人は誰かと言えば、左丁である。

（2022 年 4 月 29 日　上村泰裕）

【参考】

柴田了光之墓（千村諸成識）
府城の西、琵琶島の農、柴田氏、諱は良無、字は久作、法名は了光、その居は喝々齋と称す。…久作氏は天性寡欲にして仏教を喜び、夙に出世解脱の旨を悟り、名利を以ってその心を攖せず。また俳諧歌をつくることを喜び、風雲月露に嘯傲す。世、目するに風流清逸の士を以ってす。

了光句碑
佐くら咲山や志多行鐘の声　茶丁
（桜咲く山や下行く鐘の声）

千村諸成（1727～1790）は尾張藩士。漢詩人、画家、陶芸家。著書に『自適園集』『自適園遺稿』。
http://e-library2.gprime.jp/lib_city_nagoya/da/detail?tilcod=0000000005-00000537
http://e-library2.gprime.jp/lib_city_nagoya/da/detail?tilcod=0000000005-00000536